

6. 学生スタッフの班活動

ボランティア・NPO活動センターでは、学生スタッフが日常的に活動しています。センターの活動や認知度を広めたり、センターの環境を整えたり、また、コーディネートのスキルアップなどを目的に、班に分かれて様々なことに取り組んでいます。

今年度はコロナ禍のため計画通りの活動ができませんでしたが、班によっては計画を立て直し、工夫して取り組みました。柔軟な対応や発想の転換といったことが求められ、みんな苦勞していましたが、今年度の経験は大きな糧となることと思います。

班名	クリエイティブ班（深草）
趣旨・目的	センターを利用する学生や職員が足を踏み入れやすい雰囲気づくりのために、センター内の環境を整える。
班メンバー	長谷川 鈴音(経済4) 吉田 樹(法学4) 佐々木 大悟(政策4) 佐藤 鴻河(政策4) 森 日奈子(文学3) 松尾 宗次郎(経済3) 西村 志穂(政策3) 福島 麻斗(政策3) 谷垣 俊弥(法学2) 小林 初音(国際2) 徳田 光輝(文学1) 崇田 ゆきの(文学1) 三野 涼介(経済1)

1. 活動目標

A. 【センター内装飾】

季節ごとのPOPなど、目に留まる掲示物を定期的に作成することで、一般学生が新センターに立ち寄りやすい雰囲気を作る。

また、班員以外の学生スタッフを巻き込んで作業するなど、やりがいや達成感を感じる機会を作ることで、学生スタッフ間の雰囲気を向上させる。

B. 【リユース傘の貸出】

以下2つの観点から学生スタッフ企画として継続し、現在はクリエイティブ班がとりまとめを担当している本取り組みを継続しつつ、今後は学生スタッフ全体の日常的な活動にするため、管理・貸出マニュアルをクリエイティブ班が作成する。

- (1) 「突然の雨のためだけに傘を買うのはエコじゃない。」という想いから、2005年に深草キャンパス学生スタッフの「環境班」の活動として始まった。リユース傘は、忘れ物として学生部に届けられて一定期間保管された後、所有者が不明のため廃棄する傘を譲り受けたものである。以降、学生スタッフ企画『リユース傘貸し出しプロジェクト』として継続し、班再編を重ねる毎にどこかの班がとりまとめを引き継いできた。
- (2) リユース傘を借りるために来室した学生、教職員に対して、環境啓発と共に、センターの活動広報する機会になるため。

写真①



写真②



2. 活動内容

A. 【センター内装飾】

- ・後期が始まる前に、室内を切り紙などで装飾したり、その後も季節に合わせて装飾を変えたりした。(写真①参照)
- ・看板(ブラックボード)を1回生メンバーが秋、冬、春と季節の模様やボラゴンのイラストを入れて描き変えた。ブラックボードには、センターの広報媒体のQRコードを入れて情報にアクセスできるようにした。(写真②参照)

B. 【リユース傘の貸出】

- ・貸出：合計 17本 内訳は以下の通り
 - 6月 10本
(学生の入構制限中で職員が対応)
 - 10月 4本
 - 11月 1本
 - 12月 1本
 - 2月 1本
- ・その他、傘の点検や補充など

C. その他

前期の『ついでと大作戦』(P.62～63)で発信内容を考え、合計 10 ツイート発信できた。

3. 目標達成度

A. 【センター内装飾】

期間は短かったが、POPをはじめとした掲示物作成は、昨年よりも取り組むことができていた。これは、班員だけで作業するのではなく、他の学生スタッフにも呼び掛けるというアイデアを出しあった成果だと考える。

B. 【リユース傘の貸出】

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、学生全体の生活スタイルが変わり、通学する機会が激減したため、貸出本数やセンターの広報機会は少なかった。また、貸出ルールを理解している上回生が集まるのが難しかったため、マニュアル作成に向けての話し合いができず、作成に至らなかった。

4. 学んだこと・今後の課題

今後の課題として、1つ目に「リユース傘プロジェクト」があげられる。このプロジェクトは、班の再編を経ながら学生スタッフ企画として13年間続き、ここ数年はクリエイティブ班の担当となっている。しかし、2019年度のクリエイティブ班はリユース傘メインとなってしまう、その他の活動に取り組みなかったり、実際に傘貸し出しを行っているのは各シフトすなわち学スタ全員であったりすることから、リユース傘は

学スタ全体のプロジェクトにしてもよいのではないかという声が2020年度の活動計画段階で上がった。今年度は実現しなかったが、班員だけでなく学スタ全員で話し合い、今後の「リユース傘プロジェクト」の取りまとめについて決めていく必要がある。

2つ目にコロナ禍での活動のあり方が課題としてあげられる。材料が必要な掲示物の作成は、センターでの対面ありきで行ってきたため、オンラインにするのは難しいと前期の活動を通して感じていた。クリエイティブ班は来年度渉外班と統合し、新しくアクティブ班としてスタートするが、活動内容にはこれまでの各班の取り組みも少なからず含まれている。そのため、今年度の前期のような状態に陥った場合にどのような活動ができるのか、また後期のように活動再開しても思うように来室できないメンバーは、在宅でどんなことができるのか等を考える機会を持ちたい。

3つ目にこれまでのクリエイティブ班の活動を通して、引継ぎをきちんとすること、新しく考え出すことの2点を大切にすると感じた。今までも代変わりの際にしっかりと引継ぎがされず、いつの間になくなっていく取り組みもあったため、班としての役割や本来の目的を見失いつつあった。続けて実施するかは年度毎に決めればいいが、活動の引継ぎはすべきであると感じた。また、活動がリユース傘とPOP作りに特定してしまっていたことも、活動の幅を狭めたことにつながったと考えている。過去の活動を知らなくても、コーディネーターシフトで使う台紙レイアウトをクリエイティブ班がデザインするなど、新たな取り組みを考えて実行することで活動の幅を広げることは可能である。今後の班活動では引継ぎをきちんと行い、後輩たちには新たなことにも挑戦してほしいと思っている。



〈報告者：西村 志穂〉

班 名	広報班 (深草)			
趣旨・目的	様々な広報手段を通して、本学学生や教職員にボランティア活動の啓発を行い、ボランティアに興味・関心を持ってもらうきっかけを作る。また、ボランティア・NPO 活動センターの周知を行い、センターの認知度向上を目指す。			
班メンバー	木村 太翼 (文学 4) 森清 文聡 (法学 3) 園原 聖 (法学 2) 喜多 真央 (文学 1)	川村 有希 (政策 4) 世田 丈貴 (法学 3) 竹内 祐人 (法学 2) 小峠 友香 (経済 1)	松田 侑子 (国際 4) 渡邊 愛加 (法学 3) 藤原 壱成 (法学 2)	神田 瑞季 (経済 3) 川根 脩那 (法学 2) 井関 萌乃 (文学 1)

1. 活動目標

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響によりボランティアがあまりできない中、それでも自分たちにできることを探して広報活動に取り組む。また、成就館に移転した深草ボランティア・NPO 活動センターの認知度向上のための活動も行う。

2. 活動内容

A. 【広報誌「ボラゴン」の発行】

当初は春と秋に計 2000 部発行する予定であったが、状況が変わり大々的に配布物を配ることができなくなったため、予定を以下のように変更した。

1. 春号 8 ページ 約 50 部印刷と HP 掲載 (写真①)

- ・センターの紹介
- ・新センターの場所
- ・ボランティアの魅力について
- ・ボランティアの紹介

2. 20 周年記念号 8 ページ HP 掲載のみ (写真②)

- ・活動拠点の紹介
- ・ボランティア紹介
- ・新学生スタッフへのインタビュー

B. 【ツイート作成】(写真③)

両キャンパスの学生スタッフとコーディネーターで内容を考え、センターの Twitter 公式アカウントで発信する『ついでと大作戦』(P.62～63)の深草部分について、前期中は各班にも協力してもらう仕組みを考えた。広報班からの発信内容は、前期だけでなく後期も引き続き定期的に取り組んだ。

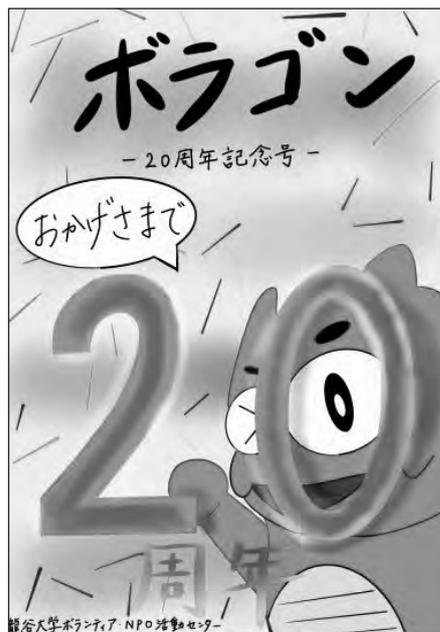
C. 【ツイート作成ワーク】(写真④参照)

シフト時に時間が空いている学生スタッフにツイートの作成をしてもらうワークを企画し、実施した。センター内にあるチラシの内容をツイートにすることで、ボランティア情報を共有することも目指した。

写真①



写真②



3. 目標達成度

写真③

A. 【広報誌「ボラゴン」の発行】

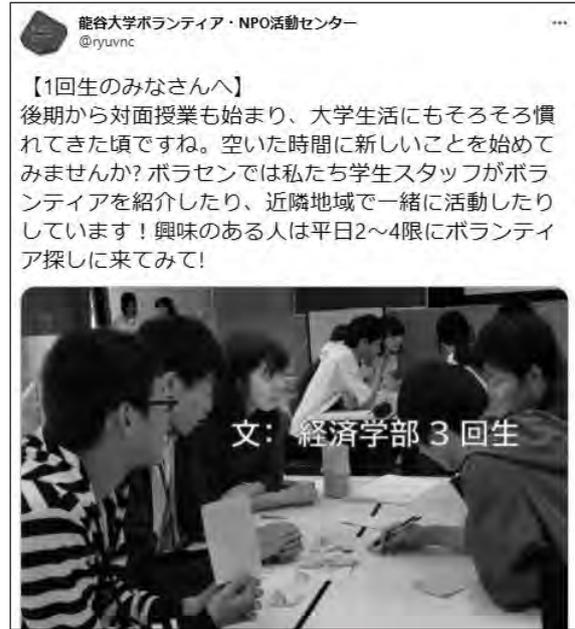
- ・「広報誌を見て来室した」といった声を得ることを目指していたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で配布すらできなかったのが、達成度が見えにくい状態となった。

B. 【ツイート作成】

- ・センターの SNS を見て、ボランティアに興味を持って来室してくれた学生が7名あった。
- ・オンラインが中心の状況になってしまったが、全員でアイデアを出し合えば、この状況でも活動できることがあるのだと実感できた。

C. 【ツイート作成ワーク】

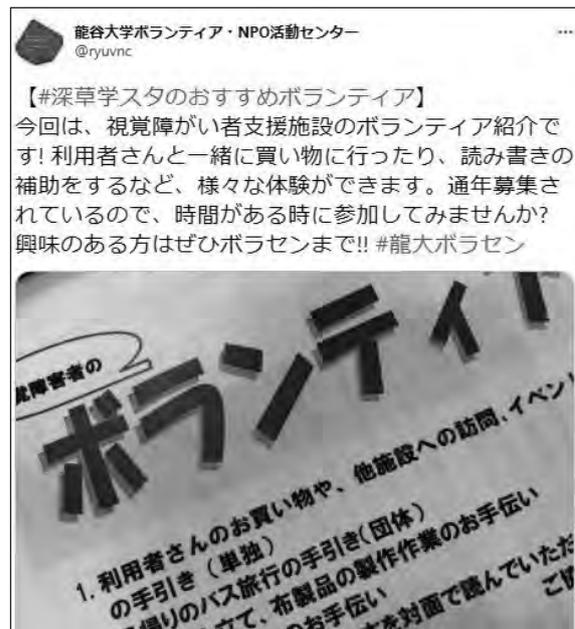
- ・学生スタッフから「チラシ内容を改めて知ることができて良かった」との声が得られた。



4. 学んだこと・今後の課題

- ・班員にとっては、ツイートや広報誌の記事を作ることでボランティアの魅力などを再認識したり、ボランティア初心者に対するアプローチの仕方を考えたりする良い機会になった。
- ・広報誌の完成が締め切り間際になってしまったため、今後はより計画的に進めていく必要がある。
- ・班内での共有情報が人によって偏ってしまうことがあったため、今後は確認を徹底していく必要がある。
- ・広報誌の記事を作るにあたって、載せるボランティアが似たようなものになってしまうことが多いため、他の班と提携して新しいボランティアの発信にも取り組んでいきたい。

写真④



〈報告者：神田 瑞季〉

班 名	コーデ班 (深草)
趣旨・目的	学生スタッフのコーディネートに対応する力を向上させる。
班メンバー	中川 寛喜(経済4) 平居 凜華(経済4) 林 海斗(文学3) 黒崎 雄太(経済3) 安本 大輝(法学3) 濱田 葵(文学2) 早川 歩伽(文学2) 永野 凌平(経営2) 大原 健太郎(経営1) 伊野 涼雅(短大1) 山本 那津子(短大1)

1. 活動目標

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、新学生スタッフがコーディネートする機会が少なかった。そこで、来室者の対応や、チラシの管理方法について、最低限の知識を身につけるため、分かりやすいマニュアル作成を目標に掲げた。

2. 活動内容

A. 【マニュアル作成】

コーディネートをする際に必要な流れ、チラシの配架や廃棄について、分かりやすくまとめた。

B. 【コーデ講座】

班員が抱くコーディネートに対する悩みや不安を、コーディネーターに相談する時間を設けた。

C. その他

新学生スタッフに向けた班ごとのプレゼン用に寸劇を撮影し、オンラインのスタッフミーティングで発表した。台本作成や、劇中の小道具にこだわった。

3. 目標達成度

A. 【マニュアル作成】

マニュアルを作成したことで、シフトの取り組み方が分かりやすくなったという声を得られた。

B. 【コーデ講座】

班員が積極的に質問することで、自身の課題を解決することができた。

C. その他

発表の約1ヶ月前から取り掛かった。普段の班の雰囲気を表すような、明るく、ほっこりするような劇を作り上げた。

4. 学んだこと・今後の課題

コーデ講座は班員に好評で、今後も実施したい。来年度は、講座で学んだことを学生スタッフに共有し、全体のコーディネート力の向上に努めたい。

今期は来室者に対応する機会が減り、まだ不安を抱えている新学生スタッフも多い。模擬

コーデを実施し、まずコーディネーターがどのようなものなのか、体験してもらう必要がある。

オンラインコーデを見据えた情報シートの管理や、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響でボランティアを受け入れていない団体の把握が不十分だった。コーディネーターとさらに意思疎通を図り、情報共有を徹底したい。



〈報告者：安本 大輝〉

班名	渉外班（深草）
趣旨・目的	地域団体の見学・訪問や実際の活動に参加し、より詳しい情報を得てボランティア紹介に活かす。
班メンバー	竹本 智紀（経済4） 樋口 大輝（政策4） 武村 祐資（政策4） 上田 雄介（政策4） 大嶋 優作（政策4） 西野 亜優（経済3） 山崎 迅一郎（経済3） 平尾 萌衣（政策3） 石井 翔大（経済2） 岡田 祐依（経済1） 三宅 碧斗（経済1） 松本 航紀（経営1）

1. 活動目標

チラシのないボランティア先の紹介が難しいと感じたり、学生スタッフの活動先が固定しているので、紹介できる団体の幅を広げるため、今年度の取り組みとして以下を計画した。

A. 【チラシのないボランティア先の紹介】

渉外班が実際にそのボランティアを体験し、体験内容をチラシ風にまとめて全体に共有することで、紹介しやすくする。

B. 【学生スタッフのボランティア経験を増やす】

後期から入った新スタッフに地域団体のボランティアへ参加してもらい、その情報を共有して様々なボランティア紹介に対応できるようにする。

2. 活動内容

A・Bともに、計画を立てることはできたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により活動を自粛する必要があったため、実行できなかった。

その他、対面以外の活動として、前期の『ついでと大作戦』(P.62～63)で発信する文章について、渉外班が担当であった2回分はペアで一つの内容を考え、合計12ツイート作成できた。

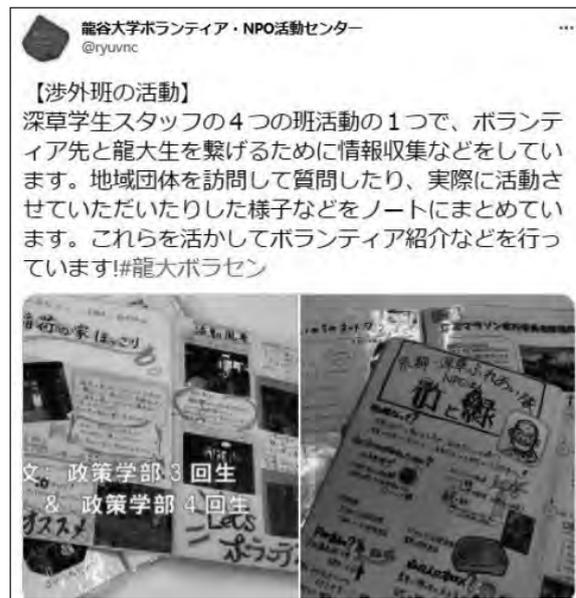
3. 目標達成度

計画を立ててから実行に移すまでに時間がかかったため、効率よく計画・実行できる方法に変更すべきだった。

4. 学んだこと・今後の課題

チラシのない団体にこだわらず、コロナ禍でも募集している団体の話を聞くことで、学生に感染対策の情報を合わせて紹介することもできると感じた。今後も活動できないような状況になっても、対面ではなくオンラインを活用して団体と繋がることができると考える。

『ついでと大作戦』については、コロナ禍により思うように活動できない中でも取り組めたことは良かった。一方で、2人組になって内容を考えたが、全体共有を怠っていたため、似た内容がいくつかあったことが反省点である。



〈報告者：平尾 萌衣〉

班 名	コーデ班 (瀬田)
趣旨・目的	コーデ時間の管理や企画などを通して学生スタッフのボランティアコーディネータ力向上のサポートをする。他の班とは違い、学生スタッフに対して働きかけ、普段のコーデをより快適に、より有意義なものにできるように整備する。
班メンバー	頼田 翔平(理工4) 東 里音(社会3) 木ノ上 莉那(社会3) 杉山 わかな(社会2) 川上 賢人(農学2) 中西 亮太(社会1) 谷垣 美幸(農学1)

1. 活動目標

今年度は1回生が入る時期が前期から後期へと大幅に遅れたため、例年と比較して、1回生はコーデの経験が少なかったと考えられる。1回生のコーデシフトの基礎力向上等のサポートをすることを中心に動いていくことを活動目標とした。

※年度当初は、学生スタッフ全体のコーディネーション力向上を目標と掲げていたが、前期は入構ができず、班としての活動ができなかったため、後期開始のタイミングで新たに目標を立てた。

2. 活動内容

- ・春休み、夏休みにそれぞれコーデシフトを調整し、シフト表を作成した。
- ・後期に、日誌の枚数が少なくなるたび印刷を職員に依頼し、補充した。
- ・6月ごろに Twitter での班紹介投稿文の作成を行った。
- ・10月ごろ、新学生スタッフ向けの班紹介の動画を作成した。
- ・今年度は学生スタッフが不在のシフト時間も多かったため、学生スタッフの在室時間がわかる表を作成し、掲示板に掲示した。

3. 目標達成度

コーデシフトを組む際に1回生にはシフトの希望を第3希望まで聞き取り、必ず先輩とコーデに入れるように努めた。それにより、各々のコーデの中で1回生をサポートすることができた。しかし、班の中の活動としてはほとんどできなかった。

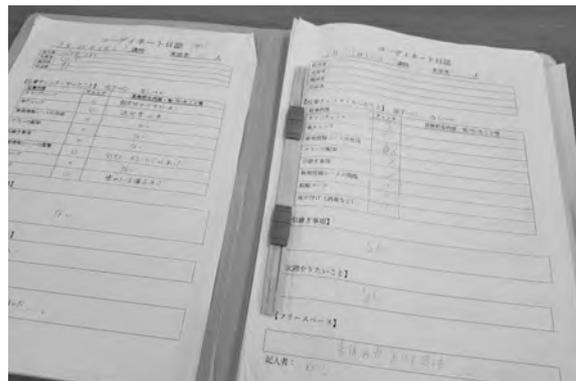
4. 学んだこと・今後の課題

◎良かったこと

- ・班ミーティングは全員がほぼ参加して活動することができた。それぞれが役割を持ち、会えない中でも活動ができた。それにより、世代交代もスムーズにできた。
- ・今年からシフト調整の方法を変えた。負担が減り、希望調査の回答率も良くなった。今までの方法に囚われなくても良いという

ことに気が付いた。

- ・コーデシフトを工夫したことにより、1回生はシフト中の時間の使い方など基本的なことを学ぶことができた。



◎課題

- ・今年ならではの課題はたくさんあったので、もう少し積極的にコーデ班が動くべきだったと思う。今年は特にコーデ時間中に来室者が来なかったときの活動の提案など様々なニーズがあったと思う。
- ・本コーデができなかったことに加え、模擬コーデも一度もできなかった1回生がいる。今年度は班内での話し合いの機会が著しく減少したことにより、模擬コーデの提案をすることができなかった。来年度は話し合いの場を定期的に設け、模擬コーデを行う期間を設定し、全ての学スタが模擬コーデを一度はできるようにするなど求められていることに対応できるようにしたい。
- ・今年度は来室者が少なかったことから本コー

デの場が減り、十分なボランティア啓発ができなかった。そこで、広報班と連携してコーデ時間中に広報の手段について考えたり、広報の方法を一緒に話し合うなどの取り組みを行うことができたかもしれない。

- ・コーデ時間中に各々のシフトで何をしているのかなどをそれぞれのシフトメンバーに任せすぎており、全体的に統一感がなかった。すべきことを本当にしているのかなど、コーデ班として根本的な課題を改善しなければならない。まずはコーデに入っている学生スタッフの意見などを積極的に聞き、課題を把握すべきだったと思う。
- ・例年、半期ごとに最後のコーデ時間におこなっているふりかえりが曖昧になってしまった。
- ・この班は、うまくなり隊（前年度までの班名）の活動が基盤にあるため、他の班と比較して活動しやすかったはずだが、内向きの活

動ばかりになってしまった。

- ・コーデ力向上を目的に活動しているが、目的に応じた活動が全くできなかった。もっと学生スタッフに直接働きかけるべきだったと思う。
- ・今年度は1回生が班活動に参加した時期が大幅に遅れた。それにより、1回生があまり活動に参加できなかったので、今後は、1回生をいかに班の活動に巻き込むかということが課題になる。

〈報告者：杉山 わかな〉

班 名	環境整備班（瀬田）
趣旨・目的	センターの環境を整備する事で、学生スタッフの活動の円滑化、及び来室者の快適な利用を目指す。
班メンバー	佐藤 瑛連菜(社会3) 堤 花成(社会3) 渡中 新太郎(農学3) 家原 美月(社会2) 吉岡 秀太(社会2) 深木 真人(社会1) 堀井 涼花(農学1)

1. 活動目標

- ・センター内のチラシ、パンフレット、ポスターの管理を行う
- ・学生スタッフスペースや相談対応スペースの備品などの整理整頓、管理を行う
- ・名札と名刺の作成をする
- ・リユース傘の管理をする

上記の活動を通して、学生スタッフの活動の円滑化、センターの美化に努める。

2. 活動内容

前期は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により活動できなかった。

後期の活動は、以下のとおり。

- ・新スタッフの名札と名刺の作成。
- ・春期休暇中に、今年度の大掃除について話し合い、中止にすることを決定。
- ・センター内の環境整備について話し合い、今学期中にチラシ等の配架・廃棄のやり方、新規情報シートの書き方のマニュアルを作

成することを決定し、作成した。

- ・傘の貸し出しは行ったが、管理の呼びかけ等はできなかった。
- ・新学生スタッフへのインタビューの実施。

3. 目標達成度

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、前期はセンターに入室できなかったため、環境整備の活動ができなかった。

後期には入室可能になったものの、引き続き活動に制限があり、名札、名刺の作成等の一部の活動しかできなかった。対面での活動の代わりに班ミーティングもオンラインでミーティングを行うなどの工夫をすることができた。

リユース傘の管理については、積極的な活動ができなかった。

4. 学んだこと・今後の課題

センター内の良好な環境を保つためには、班のメンバーだけでなく、学生スタッフ全員に環

境整備について理解してもらう必要があると感じた。今後、学生スタッフ一人ひとりがセンター内の環境整備を意識できるよう、ラベルを貼って備品の収納場所をわかりやすくするなどの工夫を行っていく。

センター内の環境をより活動しやすいものにするために、こまめにミーティングを行って現状把握をするなど日頃から気にかけて活動を行っていき、学生スタッフ及び来室者にとって利用しやすいセンターになるよう創意工夫を継続する。



〈報告者：家原 美月〉

班 名	広報班（瀬田）
趣旨・目的	主に龍谷大学の学生に向けてボランティア情報等を発信することによって、ボランティア・NPO 活動センターの存在をアピールするとともに、ボランティア啓発を行う。
班メンバー	青山 友香（社会3） 高岡 宏幸（社会3） 平井 美来（社会3） 余村 瑠香（社会3） 近藤 真佑華（農学3） 橋本 奈津子（農学3） 小沼 芳暉（理工2） 林 大誠（社会2） 安原 拓真（社会2） 小谷 悠真（農学2） 遠藤 瑞規（先理1） 鳴海 彩紀（農学1） 平石 陽菜乃（農学1）

1. 活動目標

広報誌や掲示板、SNS 等を用いて、ボランティア・NPO 活動センターの存在を学内外にアピールする。ボランティア活動の啓発を行い、センターへ足を運んでくれる人を増やす。

2. 活動内容

- ・ 広報誌の新歓号の作成をしたが、入構禁止となり、配布できなかった。
- ・ 広報誌データは、センターの HP に掲載という形での頒布となった。

3. 目標達成度

広報誌の作成、掲示板の更新、SNS 投稿、Let'sボランティアをベースにした学生向けボランティア企画を予定していたが、上記以外の班の活動はできていない。

4. 学んだこと・今後の課題

今年度活動が思うようにできなかった分、来期から活発に活動し、ボランティア啓発に努める。



〈報告者：小谷 悠真〉

班名	コミュニティ班（瀬田）
趣旨・目的	積極的に学生に働きかけ、相互の情報交換と交流を行う中で、学内の様々なサークル間、学生間の繋がりを作る。
班メンバー	赤木 宏斗（社会3） 大屋 晴太郎（農学3） 矢羽田 聡志（理工2） 朝野 健太（社会2） 大和 虹輝（農学2） 高橋 慶多（社会1） 松村 優輝（農学1）

1. 活動目標

センターに登録している学内サークルの全てが、『サークル情報交換会』（P.68～69参照）に参加すること。

2. 活動内容

サークル情報交換会（9月2日、11月19日、1月13日）に参加し、参加サークルとの交流や意見交換を行った。

3. 目標達成度

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により各サークルの活動が制限されていたということもあり、サークル情報交換会に参加する団体が固定化されていたため、登録サークルの全てが参加という目標は達成できなかった。

4. 学んだこと・今後の課題

サークル情報交換会に継続して参加してくれているサークルとの関係を大切にしつつ、どうすれば登録サークルを増やすことができるかも考えていく必要がある。

また、サークル間のつながりをもった後、具体的な活動を考える一方で、コロナ禍での地域とのつながり方を考えていかなければならないと感じた。



〈報告者：朝野 健太〉

班名	発掘し隊（瀬田）
趣旨・目的	実際にボランティアに参加する事でチラシだけでは分からない情報を得る。そのボランティアの魅力を発掘し、得た情報を発掘ノートにまとめて一般学生や学スタに共有する。それを通し、より良いコードになるようにする。
班メンバー	二木 亮英（社会4） 松田 廉（社会4） 木下 綾華（社会3） 土肥 亮太（社会3） 南 佳奈（社会3） 井尻 由利香（社会2） 一色 剛滉（社会2） 岸野 洋祐（農学2） 小川 俊也（社会1） 片岡 克望（社会1）

1. 活動目標

- ・環境分野のボランティア情報を求める学生が増加傾向のため、環境分野での活動と発掘ノート作成を行う。
- ・教員を目指す学生も多いため、社会的背景（貧困・待機児童）を学習し、昨年度訪問した「多文化共生支援センター SHIPs」との比較や独自の魅力を発掘する。

2. 活動内容

- ・今年度は新型コロナウイルス感染症感染拡

大の影響により、少人数によるボランティア活動の実施を計画した。

- ① 森の風音（森林整備）
- ② ブレイクスクール（学習支援）
- ③ バンブーフレンズ（竹林整備）

上記3団体での活動と、発掘ノートの作成を予定していたが、緊急事態宣言発令により、課外活動の制限がかかり、活動できなかった。

- ・班紹介や引き継ぎについては、オンライン上で行った。

3. 目標達成度

前述の①～③の団体に分かれて活動する予定であったが、緊急事態宣言発令により中止となったため、活動できなかった。

4. 学んだこと・今後の課題

コロナ禍により活動制限がある中でも、Twitter 等によるデジタル上の発信などができるのではないかという意見が出た。今後、取り組みを検討していきたい。

例年、訪問先を決めたり発掘ノート作成のスケジュール調整が十分ではなく、活動後、ノートの共有までに時間を要することが多いことから、今後は計画性をもって取り組んでいきたい。

〈報告者：岸野 洋祐〉